

宗祇が見た戦国時代の太宰府

宗祇は室町・戦国時代に活躍した連歌師です。その著にかかる紀行文「筑紫道記」は、文明21（1480）年秋、周防・長門・筑前・豊前守護であった大内政弘に招かれて山口に下向した宗祇が、9月6日～10月12日の36日間にわたって太宰府・博多などをめぐった旅行記です。

この旅は各地の歌枕探訪と太宰府天満宮への参詣を目的とするものでした。南北朝時代に連歌興隆に大いに貢献した連歌師救済は、天神信仰と結びつくことで連歌を興隆させることを企図し、自身も太宰府天満宮に参詣して句を詠みました。これに習い、その後多くの連歌師たちが九州に下向しましたが、宗祇もその一人です。宗祇が歌の神である天神の神前に参る場面では、涙があふれて袖を濡らし、読経の声も止んでしまします。この様子に、ようやく念願の天満宮参詣を果たしたという宗祇の感動を読みとることができます。

中世紀行文学中の白眉ともいわれ、この作品の文学的価値については論をまたないのですが、歴訪した各地の当

太宰府人物志

資料室だより②

時における状況についての記述は、この史料を歴史史料としても価値の高いものにしていきます。9月17日～20日に滞在した太宰府周辺の様子をみてみましょう。

太宰府天満宮では、鳥居より入ると松・杉その他の常緑樹（おそろく樟）が茂り、池の周りには梅林が広がり、楼門・廻廊などがありました。宿坊としては社家の満盛院と花台坊が確認でき、江戸時代における宰府宿の古い様相を見ることができきます。観世音寺では、諸堂・塔婆・廻廊などがなく、かなり荒廃している様子ですが、講堂と金堂が確認できます。観世音寺の鐘の音を聞いたという記述は、菅原道真が漢詩に詠んだこの鐘が当時においても著名であったことを示します。

また、都府楼跡については、「境内みな秋の野らにて大きな礎の数を知らず」とあり、現在同様、野原の中に大きな礎石が数多く並んでいる状態であったことがわかります。このほか、「大いなる堤（水城跡）」、荻萱の関の関守の記述など、興味が尽きません。